地域の連携と若い力で未来に虹の架け橋を

── 岐阜県北方町における水稲新品種「にじのきらめき」連携プロジェクト ──

主任研究員　小針美和

JAぎふ管内の岐阜県北方町では、生産者、JAと行政および同町内にある岐阜農林高等学校の４者が連携し、町の地域農業振興と同校の研究・教育の充実に向けて取り組むため、2020年８月12日に連携協力協定を締結。地域農業の課題のひとつである高温障害によるコシヒカリの品質低下への対応と新たな特産品づくりを目指し、水稲新品種「にじのきらめき」の栽培技術確立、販売促進に向けた連携プロジェクトを始動している。

1　高温に強く、味が良く、収量も多い「にじのきらめき」

コシヒカリは長年日本における良食味のブランド米として君臨し、主食用米作付面積の３分の１を占める。しかし、近年は温暖化の進行に伴い、登熟期間中の高温の影響による白未熟粒発生やウイルス性の縞葉枯病（しまはがれ）により、品質や実質収量が低下している産地が増えている。

これらの課題を克服すべく農研機構が開発・育成した品種が「にじのきらめき」である。①高温耐性がある、②草丈が短く倒れにくい、③縞葉枯病への抵抗性が強いことに加え、④大粒でコシヒカリ並みの食味があり、⑤コシヒカリに比べて標準栽培で15%、多肥栽培では３割弱の多収が見込めるとされる。北陸、関東、東海以西の本州で広く栽培が可能であり、生産者・地域、実需者双方から注目が高まっている。

写真１　協定締結式（JAぎふ提供、以下同じ）

2　JAぎふにおける「にじのきらめき」の導入・普及

夏の暑さが非常に厳しいJAぎふでは、年々深刻化するコシヒカリの品質低下への対応策を模索するなかで、いち早くにじのきらめきに着目。18年産から実需者、卸売業者と連携し、管内のほ場1.2haで実証栽培を開始、19年産では30haを作付けた。

その結果、管内の平均単収（７～８俵）に対し、にじのきらめきは９俵を超え、未熟米の発生具合もコシヒカリより少ない。また、玄米品質はコシヒカリより優れ食味もよく、実需者との試食会でも好評を得るなど、新品種の手応えをつかんだ。

さらに、農産物検査の産地品種銘柄登録に申請、岐阜県の選択銘柄となり、20年産米からは検査を受ければ「岐阜県産 にじのきらめき」と表示できるようになる。これらの推進強化も奏功し、JAぎふ管内における20年産の作付面積は180haと急激に拡大している。

3　北方町における４者連携プロジェクト

北方町における４者連携のきっかけは、15年より定期的に開催している農業振興座談会だった。同町では、農業振興地域の水田を３つのブロックに分け、ハツシモ（晩生水稲）、コシヒカリ（中生水稲）、タマイズミ（小麦）によるブロッ

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

クローテーションを行っている。しかし、近年コシヒカリの品質低下が著しく、座談会で生産者から課題提起があったことを受けて、JAぎふがにじのきらめきを紹介。生産者だけでなく、地権者も試食を行うなどして地域で作付内容を検討し、20年産では、これまでであればコシヒカリを作付けていた12.6haについて、全面的ににじのきらめきに転換することとした。

また、座談会には北方町、生産者、JA、岐阜農林事務所（普及機関）のほか、同町にある岐阜農林高等学校も参加している。同校は、校内に約2.5haの実習水田をもち、毎年、授業の一環として流通科学科作物専攻生を中心に水稲の栽培・販売を行っている。座談会を通じて高温障害という地域の課題と新品種のポテンシャルを知り、新たなプロジェクトとしてにじのきらめきの栽培に取り組むこととした。

ただし、にじのきらめきへの期待は高い一方、栽培が開始されたばかりでわからないことも多い。また、まだ消費者への知名度は低く、JA等による産地としてのブランド戦略や販売促進も課題となる。議論を重ねるなかで、これらには関係者一体で取り組む必要があるということが共通認識となり、４者での連携協力協定の締結に至った。

同校での作付面積は１haほどで、学生は地域の生産者と同じ方法で栽培し、岐阜農林事務所やJAぎふも協力して生育調査を実施。その成果を関係者と共有してよりよい栽培方法を研究し、収穫後はお米甲子園等のコンテストへの出品、入賞を目指す。また、校内やJA直売所での販売のほか、地域住民やJAにも参画を呼びかけ食味試験を行うなど、“ご飯”としてのおいしさも追及、学生のアイディアによる新たなプロモーションにつなげていくこととしている。

4　地域を超えた連携

連携は地域内にとどまらない。本プロジェクトでは、品種特性をより深く知り、品種に適した栽培体系の構築を目指そうと他産地との連携も進めている。８月12日の調印式終了後には、茨城県のJA北つくばとZoomによる意見交換会を実施した。

写真２　Zoomによる意見交換会での学生の報告

JA北つくばは20年産の作付面積が160haとJAぎふに並ぶにじのきらめきの産地で、JAと生産者部会、地域の普及機関が協働して栽培のポイントに合わせて現地検討会を開催するなど、栽培体系の確立、品質・収量の向上を目指して積極的に取り組んでいる。20年２月には、JA北つくばの生産者部会がJAぎふを訪問して産地間研修会を開催、それをきっかけに、両JAでは互いの栽培暦や生育調査資料等を情報共有している。

意見交換会では、同校の学生が校内水田での生育調査結果を報告、それを受けて岐阜農林事務所が管内の生育概況と栽培管理のポイントを補足。JA北つくばからは管内の生育状況等を説明し、「収量確保に向けて工夫していることは？」という岐阜からの質問に、管内で実践している収穫期までの水管理等を参考にアドバイスするなど、活発な意見交換がなされた。

同校でプロジェクトを指導する吉倉英明氏は、「このような形で地域の生産者、関係機関と農業高校が連携し、新品種の栽培・普及にチャレンジする取組みは、全国を見渡してもあまり例がないのではないか。にじのきらめき連携プロジェクトが未来への虹の架け橋となり、若いパワーで地域を活気づけていきたい」と意気込みを語った。

（こばり　みわ）